

日野市に寄贈された『稲生物怪録絵巻』

いのうもののけろくえまき

日野市郷土資料館では、平成10年に井上恒正氏より「三十日の月(稲生物怪録絵巻)」1巻を寄贈されました。主人公稲生武太夫(平太郎)は、江戸時代に現在の広島県三次市に実在した人物で、寛延2年(1749)7月に屋敷に現れた様々な妖怪との戦いを記録したものが、絵本や絵巻となって今日に伝えられています。絵本では、妖怪は魔力も強く恐ろしい存在として登場しますが、絵巻に現れる妖怪は、どこかほのぼのとしています。女性や子ども向けに描かれているためかもしれません。

日野に由来する内容ではないので、長く公開の機会がありませんでしたが、平成20年秋の特別展「ほどくぼ小僧・勝五郎生まれ変わり物語」で、平田篤胤の幽界冥界研究のひとつとして紹介し、好評でした。また、21・22年と全場を公開したところ、今まで存在を知られていなかった絵巻であるということで、反響がありました。

『稲生物怪録』の諸伝本について

『稲生物怪録』には、①文章を中心にしたものと、②絵を中心にしたものの2つがあります。①はさらに

A 武太夫の友人柏正甫が、武太夫から聞いたことをまとめたもの(「柏本」)。

B 武太夫自身が書いたとされる『三次実録物語』。

C A・Bの内容を整理し、平田篤胤と門人達が校合し、出版を目標に整理したもの(平田本)。

の3つに分類されます。

②には、絵本と絵巻があります。絵本には、広島藩浅野家の姫養寿夫人の求めに応じて武太夫自身が描いて献上したものと伝えられています。現在は、秘蔵されていたその絵本を、文化6年(1809)猪狩正毅という人物が写したものが伝えられています。絵巻は、これらの伝本や絵本をもとに製作されたものと考えられます。

郷土資料館が寄贈を受けた「三十日の月」は、現在三次市にある堀田静子家所蔵の絵巻(堀田本、三次市重要文化財、『三次実録物語』の系統)と内容はほぼ同じもので、堀田本に欠けている冒頭の3場面が存在するほか、後筆の書き込みがあります。「三十日の月」という題も他の絵巻にはないもので、昨年広島で発見された写本にあるのみということです。「三十日の月」は新月なので、月の姿は見えません。存在するが見えない月と、なかなか本当の姿を現わさない妖怪を重ね合わせているのでしょうか。(広報では4場面とありますが3場面に訂正します)

現在『稲生物怪録』として存在が知られているものには、写本34、絵本6、絵巻12などがあるということです。井上恒正コレクションのものは、これまでその存在が知られていなかったものです。

〈稲生武太夫の地元では…〉

稲生武太夫は、広島藩支藩三次藩御徒歩組(おかしぐみ 12石4人扶持)に属していた武士でした。享保5年(1720)三次藩は広島藩に合併、宝暦8年(1758)に家臣たちは広島へ引き上げたため、武太夫も広島へ移転しました。武太夫は、江戸に上ったこともありました。享和3年(1803)12月に70歳で亡くなりました。

稲生家は現在も広島市内に居住し、当主は稲生平太郎を名乗っています。三次市や広島市には、稲生武太夫ゆかりの遺跡がいくつかあり、彼が実在した人物であることがわかります。

①稲生武太夫の碑(三次市三次町)

②稲生武太夫の墓(国前寺 国前寺 広島市東区山根町) 広島藩二代藩主の菩提寺で、毎年1月7日には、稲生祭が行なわれ、武太夫が山本五郎左衛門からもらった妖怪退治の木槌が公開されます。

③稲生武太夫の墓(本照寺 広島市中区小町) 稲生家の菩提寺。武太夫の戒名は「観光院徳純信士」。

④稲生神社(いなりじんじゃ 広島市南区稲荷町) 稲生武太夫も祭神の一人。火災除けの神様として信仰されています。

三次市では、「平太郎でまちおこし」を合言葉に、展示やイベントなど様々な取り組みが行なわれています。また、杉本好伸氏(安田女子大学教授)をはじめとする研究者によって、諸伝本の様々な比較研究が進められています。日野市所蔵のものは、縁あって寄贈された貴重な絵巻ですので、市民の宝物として大切に伝えていきたいと思えます。

〈物語のあらすじ〉

江戸時代の中ごろのことです。備後国三次（広島県）に、稻生平太郎という16歳の少年がいました。平太郎が12歳の時に、両親は亡くなってしまったので、5歳になる弟と、家来の権平とともに暮らしていました。

平太郎の家となりに、三井権八というすもうとりが住んでいました。権八はとても強かったので、すもうをならいに来る弟子がたくさんいました。五月の終わりごろのある夕方、権八が平太郎の家にやってきていました。

「今晚山にのぼって、きもだめしをしよう」。

平太郎は、「いいとも、百物語をしてから、くじびきであたったほうが、行くことにしよう」といいました。

百物語は百本のろうそくをともして怪談話をする遊びです。百物語をすると、ほんとうに妖怪があらわれるという言い伝えがあります。くじに当たった平太郎は、まよなかにひとりで山へ行きました。平太郎は、雨の中、まっくらな山道をおいて、やっと頂上の杉の木にしるしをつけて家に帰りました。権八が、心配して途中までむかえにきていました。しばらくは、なにもおこりませんでした。

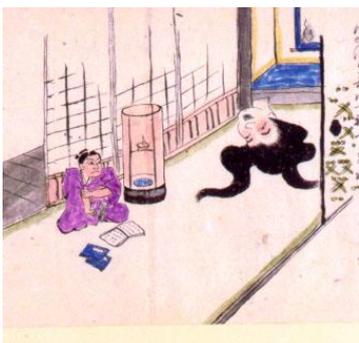
〈1日目〉 7月1日の夜のことで、弟と蚊帳（かや）のなかでねていると、しょうじがひるまのように明るくなりました。おどろいて外にでると、おおきな毛だらけの手に、つかまえられてしまいました。塀のうえには大男がいて、お日様のような光が出ていました。平太郎は、少しもこわがらずに、刀をとって退治しようとしたが、妖怪はにげてしまいました。

けらいの権平は、勝手口からにげようとして気をうしなってしまうました。となりの権八の家には、ひとつ目小僧がきて、かやのまわりをぐるぐるまわりました。次の日、平太郎と権八は、力をあわせて妖怪をやっつけようと約束しました。



〈2日目〉 夜のこ、行灯の火がきゅうにもえあがりましたが、平太郎は気にせず寝てしまいました。平太郎がふとんに入ると水がざぶざぶとわきだしました。しばらくみていると、水はひいてしまいました。

〈3日目〉 夜、へやのすみから、女の人の生首がさかさまになって、わらいながら飛んできました。そして平太郎の顔をべろべろなめました。その気持ちわるいことといったら……。その夜、平太郎がねていると、天井



から、青いひょうたんがたくさん下がってきました。

〈4日目〉 夜、たなの上の紙が、ふわふわ舞い散りました。次の日にも、紙はちらかったままでした。

〈5日目〉 夜、権八がきていると、大きな石がはってきました。足もありカニのような目がついていました。権八が刀できろうとしたので、平太郎はとめました。次の日、台所となりのいえのつけもの石がありました。きのうの妖怪はこの石だったのか…。

〈6日目〉 夜、平太郎が外にでたら、大きな顔が戸口をふさいでいました。平太郎が小刀をなげましたが、すこしも痛そうではありませんでした。次の日、小刀だけが宙に浮いていて、平太郎が見ると、ポトリと落ちました。



〈7日目〉 夜、友だちが平太郎を助けにきました。権八が槍を持ってみまわっていると、大きなぼうずがいたので、槍でつくと、槍をとられてしまいました。みんなにそのことをはなしているとき、さっきの槍が飛んできたので、みんなこわくなって帰ってしまいました。

〈8日目〉 夜、しんせきの人に来て話していると、塩のはいった俵がとんできて、みんなに塩をまきちらしました。びっくりしていると、げたが飛んできて、ふすまをつきぬけてしまいました。しんせきのひとたちは、あわててかえってしまいました。

〈9日目〉 この日の夜は、とてもたいへんでした。まず、知り合いの人が、家につたわる名刀をもって、妖怪退治にきましたが、刀が折れてしまいました。知り合いの人は、大事な刀をこわしてしまったので、切腹してしまいました。平太郎がおどろいていると、外にゆうれいがいてみんなおまへのせいだと平太郎をせめました。そのうち、知り合いの死体もなくなってしまい、妖怪のしわざだということがわかりました。

〈10日目〉 夜、平太郎がなかよくしている友人が来ました。話をしていると、その人の頭がふくれて、赤ん坊がはだしてきました。平太郎がつかまえようとすると、たたみの間にもぐってしまいました。

〈11日目〉 夜、親しくしている人がたずねてきました。話をしていると、その人の刀の鞘がなくなっていました。平太郎が大声でおこると、天井が落ちてきました。そのうちごろごろと大きな音がして、すり鉢がころがってきました。

その日の夕方には、平太郎が近所の女の人は なしている、たらいがころがってきて、女の人を追いかけました。女の方は、平太郎のいたずらかと思いました。

〈12日目〉 夜、大きなヒキガエルがはだしてきて、平太郎のふとんの上のにりました。平太郎が、ヒキガエルのおなかのまわりのひもをしっかりとぎってねいていると、よくあさヒキガエルはつづらになっていました。(つづらは、きものなどを入れておく箱のこと)

〈13日目〉 平太郎が、友だちとお寺へいくとちゅう、雷のような光る赤い石が落ちてきて、友だちにあたってしまいました。友だちをせおって家にかえりましたが、みんなこわがって帰ってしまいました。

〈14日目〉 夕方、臼がかってにうごくので、ちょうどいいと思って米を入れておきました。でも、翌日になっても米はちっともつけていませんでした。その日の夜中、天井におおきなおばあさんの顔があらわれて、長い舌で平太郎の顔をべろべろなめました。そのままにしておくと、消えてしまいました。

〈15日目〉 昼間、額のうしろから「トントサココニ トントサココニ」という音が聞こるので、額をとってみると、まえに家来がなくした刀の鞘が落ちてきました。その夜は、部屋の中が昼間のように明るくなりました。たたみが、のりをつけたようにべとべとになって、ふとんを敷くことができず、柱に寄りかかってねました。

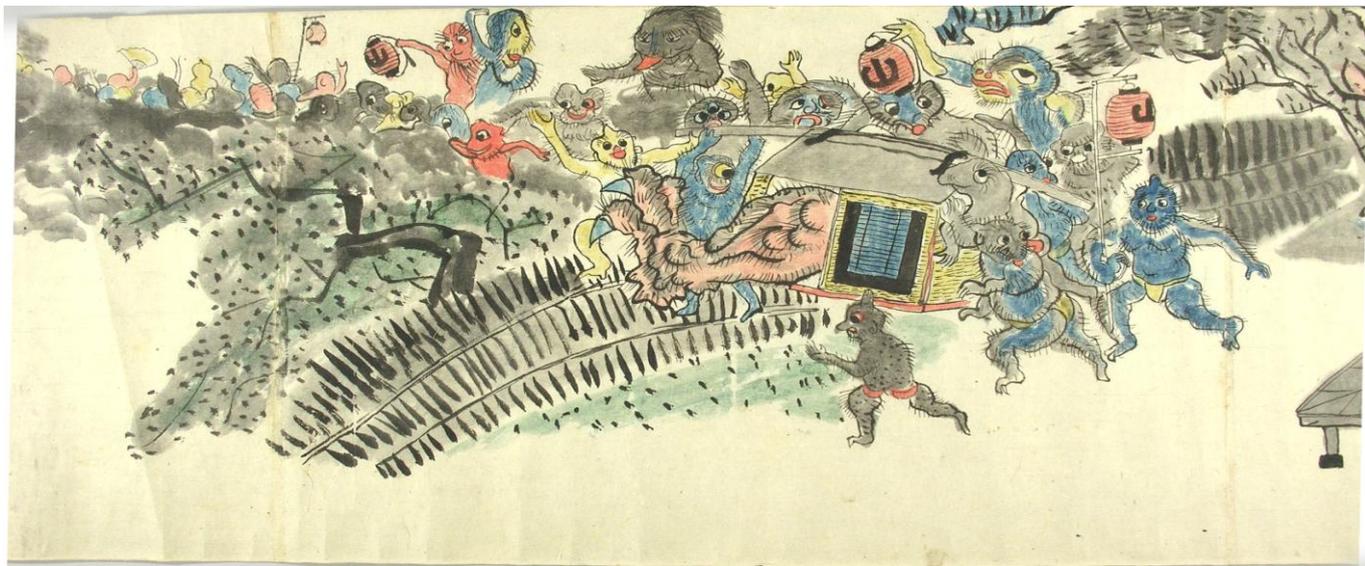
〈16日目〉 夜は、くしにささった頭がたくさん、平太郎のまわりにやってきました。やかましくてねむれませんでした。

〈17日目〉 夜は友だちがきましたが、台所につけもの桶がおいてあったり、かやのうえに刀がのせてあったり、つくえがとびまわったりしました。友だちの1人は、きもちがわるくなって帰ってしまいました。

- 〈18日目〉 朝、権八がきました。奥の部屋に行くと、たたみが、天井にひもでむすばれていました。はずそうと思ったら、落ちてきました。それから、ずずのついたつえがジャンジャンと音を立ててとびまわりました。
- 〈19日目〉 友だちのすすめで、妖怪をつかまえるわなをしかけましたが、いつのまにかわなは、やねの上にあります。
- 〈20日目〉 とてもきれいな女の人が、お菓子をもっておみまいにきてくれました。平太郎が門の外までおくっていくと、きてしまいました。あとで、おかしはとなりの家のものだったことがわかりました。
- 〈21日目〉 夜、行灯をとると、人の影がみえました。本を読んでいるようでしたが、なにを言っているのか、ききとれません。
- 〈22日目〉 ほうきがかってに部屋をはいていて、平太郎はわらってしまいました。
- 〈23日目〉 となりの権八の家に行くと、おわんやつくえなど、家のなかの道具が、みんな投げ出されています。その夜、平太郎の家には大きなハチの巣ができて、赤やきいろのあわが吹き出しました。
- 〈24日目〉 昼、一匹の大きなチョウが飛んできて、柱にぶつかる何千匹ものチョウになって、部屋をとびまわりました。その夜、行灯の火が燃え上がりましたが、平太郎は気にせず、じっと 見ていました。
- 〈25日目〉 夜、えんがわから庭へおりようとする、青い大入道がねころんでいました。まばたきする音が、ぱちぱち聞こえました。ふんづけると、たんぼのどろのようにねばりついて、やつのことでえんがわに上がりました。
- 〈26日目〉 夜、女の首が飛んできて、きみのわるいめつきで、平太郎をながめました。首の下が手になり、平太郎をなめました。



- 〈27日目〉 昼間から薄暗く、やがてまっくらになりました。かとおもうと、急にとてもあかるくなりました。夜になると、どこからともなく拍子木の音がきこえてきました。
- 〈28日目〉 夜、遠くできこえていた尺八の音が、だんだん近づいて何人もの虚無僧が部屋に入ってきました。部屋いっぱいになった虚無僧の尺八が、耳をつんざきそうでした。
- 〈29日目〉 平太郎がきょうの妖怪はなんだろうと思っていると、きみの悪い風が吹き、螢火がこなごなになって、部屋に入って来ました。
- 〈30日目〉 この日は、次々とふしぎなことがおこりました。まず、四十才くらいの武士が部屋に入ってきました。平太郎が刀をぬこうとすると、消えてしまいました。部屋の炉のふたがあき、灰が大きな頭になって、ミミズが出てきました。ミミズがにがてな平太郎が困っていると、かべに大きな目や口があらわれ、けらけら笑いました。顔が消えると、さっきの武士が現れ、自分は山本五郎左衛門（さんもとごろうざえもん）という妖怪の大親分だと名乗りました。そして、少しもこわがらない平太郎の勇気をほめ、妖怪を退治する木の槌（つち）をくれました。平太郎のうしろには、平太郎をずっと守っていた氏神さまがいて、平太郎を見守っていました。山本五郎左衛門は駕籠に乗り、妖怪の手下を連れてかえって行きました。駕籠の中からは、大きな毛むくじゃらの足が見えていました。



その後は、何事も起こりませんでした。平太郎は、家来の権平と、となりの権八とともに、氏神様にお礼のおまいをしました。

平太郎が妖怪に出会ったのは、十六歳の時でしたが、その後武士としてお殿様に仕え、稲生武太夫、稲生忠左衛門と名乗り、七十歳で亡くなるまで、とても元気だったそうです。

〈文芸作品・漫画・児童書などにみる『稲生物怪録』〉

『稲生物怪録』のモチーフは、様々な文芸作品に取り入れられています。

- ・折口信夫『稲生物怪録』
- ・泉鏡花『草迷宮』
- ・稲垣足穂 『山本五郎左衛門只今退散仕る』『懐かしの七月』『稲生家＝化物コンクール』
- ・田中貢太郎『魔王物語』
- ・巖谷小波『平太郎化物日記』（『少年世界』大正十四年八月号～十五年二月号に連載）。
- ・水木しげる『木槌の誘い』
- ・宇河弘樹『朝霧の巫女』（三次を舞台に描かれた、平成稲生物怪録）
- ・小沢正・宇野亜喜良『ぼくはへいたろう』

〈『稲生物怪録』に関する研究書・解説書など〉

- ・東雅夫編『稲生モノノケ大全』陰之巻
- ・荒俣宏『平田篤胤が解く「稲生物怪録」』
- ・杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』
- ・谷川健一編『稲生物怪録絵巻』
- ・倉本四郎『妖怪の肖像』
- ・『妖怪絵巻―日本の異界をのぞく』（『別冊太陽』170）
- ・『稲生物怪録と妖怪の世界～みよしの妖怪絵巻～』

（広島県立歴史民俗資料館（三次市）平成16年度開館25周年特別企画展展示図録）

*以上のほか、杉本好伸氏による『稲生物怪録』類書の紹介が、『鯉城往来』8～12号、『安田文芸論叢』第二輯などにある。

* 今年も、絵巻の前場面を公開するパネル展を開催中です。（9月4日まで。郷土資料館3階渡り廊下）

（日野市郷土資料館 北村澄江）